

# 目 次

---

巻頭文 福のり子	3
I. 基礎プロジェクト	12
1 鑑賞者ボランティアの構成	12
2 アメリカ・アレナスによる鑑賞者分析	14
3 京都大学による鑑賞者研究プロジェクト評価報告書	20
4 理解促進アンケート企画を終えて	33
5 学生アンケート集計	35
6 学生レポート抜粋	40
7 学生レポート全回答	57
II. 実践プロジェクト	188
1 美術館編	188
2 小学校編	194
3 中学校編	198
4 その他の報告・エッセイ	217
III. ACOP 関連取材記事	221

# 巻頭文

---

福のり子

京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科

## (1) はじめに

京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科では、2004年度から「ACOP」と名付けた鑑賞教育プロジェクトを行っている<sup>1</sup>。ACOPではグループで作品をみながら、それぞれが思ったことや感じたこと、あるいは疑問点などを話し合っていくという、対話を基本とした作品鑑賞を提唱している。「アートは難しい、わからない」と敬遠している多くの鑑賞者（特に鑑賞の初心者たち）にとって、グループで行う作品鑑賞は、ひとつの有効な方法であるという前提に立って始められたプロジェクトだ。

ACOPは、必修科目である「芸術表現演習Ⅰ・Ⅱ」を履修する1回生を対象に、通年で行われる「基礎プロジェクト」と、1回生で学んだことを基本に、2回生以上の学生が学外で行う「実践プロジェクト」の2つの活動から成り立っている。これはその報告書である。

## (2) 「基礎プロジェクト」

1回生を中心として行う「基礎プロジェクト」の目的は以下の通りである。

- \* アートとアート作品の違いを学ぶ。アートとは作品と鑑賞者の間に起こる、コミュニケーションであることを理解し、アートが生まれるためには「人」が必要であることを学ぶ。
- \* 学生ひとり一人が、作品とのコミュニケーションを図る。
- \* 将来アート界で働きたいと希望している学生たちに、鑑賞者の存在の重要性と、彼らの不安、不満、喜びやニーズなどを把握させる。
- \* 「作品」と「観客」のあいだにより密接なコミュニケーションを確立するため、両者を結ぶファシリテーターの重要性を、実践を通して学ぶ。

## ■ 2006年度活動報告

(中略。詳しくは本書参照。)

## (3) 「実践プロジェクト」

(中略。詳しくは本書参照。)

## (4) 調査／分析

ACOPの有効性や問題点を考えるにあたって、これまでも学生や「鑑賞者」にアンケートを行ってきた。しかし、対話を基本とするグループ鑑賞は日本では始まったばかりであり、

---

<sup>1</sup> ACOPは「Art Communication Project」の略で「エイコップ」と発音する。

またそれを大学の必修授業としているのは本学のみである。そのため、アンケートや分析はいつも手探りの状態であった<sup>2</sup>。今年度の回答をみると、確かに学生たちも鑑賞者も、本プロジェクト実施後の作品をみる時間は実施前より増加し、さらに自らが考える「アートの難易度」も下がっている。つまり、こうした経験を通して、鑑賞者はじっくりと作品と対峙し、その結果、作品と自分自身の距離が近付いたことが立証された。さらに、ACOPでの体験を経て「自分とアートの距離に変化はあったか」という問いに、ほぼ全員の学生が「あった」と答え<sup>3</sup>、このような体験は「自分の将来に役立つと思うか？」という問いに対しては、全員が「はい」と答えている（P45 参照）。これは本年度だけではなく、過去2年間でのアンケート調査でもほぼ同様の結果が得られた。そのため、上記の点においても、ACOPの有効性は立証できたと考えている。

また昨年の報告書にも記したように、ACOPを体験した学生たちは、授業中や作品をみているときだけではなく、日々の生活でも「立ち止まって考えること」をするようになって行く。学生たちはこれを「ACOP症候群」と呼んでいる<sup>4</sup>。これは、ACOPによる作品鑑賞が、教育の基礎である「考える習慣」を身に付けることに役立つことを示すひとつの良い例であろう。

しかし、それだけだろうか？もっと他に有効性や問題点を探る手がかりはないだろうか？そう思い続けてきた私は、過去の反省点を踏まえつつ、今年のアンケート調査にさらなる工夫を加えることにした。まず、私から学生へのアンケートに、これまでとは異なる角度で彼らと作品の関係性をみる質問を加えた。さらに、もっと客観的な立場で調査・分析をするために、下記の2つの調査を追加することにした。

まず、アンケートの調査手法を研究している京都大学大学院情報学研究科に協力を依頼し、「基礎プロジェクト」に参加いただいた鑑賞者ボランティアの方々を対象に、「対話型鑑賞についてどれだけ理解をしていただけたか」「鑑賞者としてどれだけ成長していただけたか」の2つの項目について調査・分析をしていただいた（P20 参照）。さらに、本プロジェクトに初年から協力していただいているアメリカ・アレナス<sup>5</sup>に、3回のグループ鑑賞会の前後で、上述の鑑賞者ボランティアの皆さんにどのような変化があったかを考察していただいた（P14 参照）。

（中略。詳しくは本書参照。）

4回目となる2007年度のACOPは、こういった分析や、そこから得られた反省を踏まえて、有効性と問題点をさらに考察して行きたい。日本の鑑賞教育はまだとば口にある。ACOPとしてしかりではあるが、この試みと調査／分析が、日本の鑑賞教育論議にひとつの指針を提示できればと願っている。

## （5）謝辞

高校を卒業したばかりの新入生に、4月の初めての授業で出会ったとき、彼らの不安や希

<sup>2</sup> 1980年代、ニューヨーク近代美術館が、発達心理学者アビゲル・ハウゼンと共に数年をかけて行った「鑑賞者のレベル調査」は、同分野での先駆けである。

<sup>3</sup> 全回答中1名が「わからない」と答えている。P40 参照。

<sup>4</sup> 『2005年度ACOP・鑑賞者研究プロジェクト報告書』P5～6 参照。

<sup>5</sup> アメリカ・アレナスは1984～1996年までニューヨーク近代美術館教育部に勤務し、注2の「鑑賞者レベル調査」に関わる。『なぜ、これがアートなの？』（淡交社）他、著書多数。コロンビア大学博士課程修了。美術史家であり、教育者としても鑑賞教育を実践している。

望が入り交じった、まだまだ幼い目が一斉に私をみていた。それを見つめている私にも、実は、彼らと同じほどの不安と希望があった。不安のひとつは、ACOP のためにボランティアで遠路はるばるお越しいただいた鑑賞者の皆様の、温かいご理解に報いるだけのナビゲーションを、この子たちができるようになるだろうかというものであった。私は、50 人の学生がいれば 50 通りのメニューでひとり一人とかかわってきたつもりである。しかし、泣き出す子、引きこもりになる子、声も体も震えておびえる子、「自分の時間がない」と苦情を言ってくる学生をみると、彼らの不安とともに私の不安も膨らんでいった。

しかし、今回の学生たちの学年末レポートを読み返しながら一年を振り返ってみると、彼らが本当に成長してくれたことがわかる。「福さんは、自分の学生のことを誉め過ぎだ」と、他の先生からたしなめられたので慎もうと思っはいるものの、やはり彼らの努力と成長には、心から「よくやったね」と言いたい。下記は、そのレポートからの抜粋である。

「鑑賞者の言葉は、ある意味、作品よりも生々しく鮮やかだ。同じものを見てもひとり一人違う考え、違う表現を持っている。それらを漏れなく聴けるのがナビゲーターの幸せなところ。そして、作品の可能性を閉ざさないためにも、鑑賞者の気持ちを汲み取るためにも、自分の器をもっともっと広げて行くためにも、自分自身が常に鑑賞者であり続けることが大切なのだ」

(以下、省略。詳しくは本書参照。)

京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科

福 のり子

2007 年 5 月